

論文

「場の文化」に根ざした社会福祉援助に関する研究

——ソーシャルワークにおける

「生活場モデル (Life Field Model)」の構想——

空閑浩人[†]

要約：本稿は、日本人の文化を「場の文化」とし、それに根ざしたソーシャルワークのあり方としての「生活場モデル (Life Field Model)」の構想を試みたものである。それは、日本人の生活と文化へのまなざしと、日本人が行動主体や生活主体として成立する「場」への視点とアプローチを重視するものであり、日本人の生活を支える「生活場 (Life Field)」の維持や構築、またその豊かさを目指す、言わば「日本流」のソーシャルワークのあり方である。その意味で、この「生活場モデル」研究は、確かに日本の「国籍」をもつソーシャルワーク研究である。しかし、それはいたずらに日本のソーシャルワークの独自性のみを強調し、そこに固執するものでは決してなく、日本の中だけに止まらない国際的な可能性をも持つものである。

キーワード：ソーシャルワーク、社会福祉援助、日本人、場の文化、生活場モデル

目次

はじめに

1. 日本人と「場の文化」

1-1. ソーシャルワークが機能する「OS」としての日本人の文化

1-2. 日本人とその生活を支える「場」への視点

1-3. 「場」と「場所」の違い

2. 「場」を基盤にしたソーシャルワーク

2-1. 「主体」の成立基盤となる「場」への着目

2-2. 「個」を支える「居場所」づくり

3. 「生活場モデル (Life Field Model)」の構想

3-1. 「生活場 (Life Field)」の構築や充実を目的にすること

3-2. 「場」の力へ着目するソーシャルワーク

4. 「共創」の営みとしての「生活場モデル」の展開

4-1. 日本人にとって「場」を失うということ

4-2. 「生活場」を「共創」するソーシャルワーク

5. 「日本国籍」をもつソーシャルワーク研究

5-1. 学問には「故郷」や「国籍」が必要

5-2. 「生活場モデル」の可能性

おわりに

[†]同志社大学社会学部教授

*2013年12月20日受付、2013年12月20日掲載決定

はじめに

ソーシャルワークが、何らかの生活上の困難に直面している具体の人にかかわる生活支援の実践である以上、そのあり方に関しては、単なる観念的で抽象的な議論ではなく、そのような人々の生活とそこにかかわる実践のリアリティに根ざした議論を重ねていかなければならない。ソーシャルワークの実践として求められるのは、あくまでも、日本なら日本で暮らす人々の、その個々の暮らしのかたちを尊重しながら、人々が体験する様々な「生きづらさ」や「生活のしづらさ」の改善を目指して、その生活を支える営みである。そのような生活支援では、人々の現実生活をとらえる視点が必要とされ、そこではどうしても、人々に共有されている生活様式や思考様式、価値観を視野に入れざるを得ない。その意味で、日本で生活する人々のリアリティ、すなわち多くの日本人に共有されている文化に基づいたソーシャルワークの方法や実践のあり方が求められる。

本稿は、日本人の文化としての「場の文化」に根ざした社会福祉援助、すなわちソーシャルワークのあり方に関する検討を通して、「日本流」のソーシャルワークのあり方としての「生活場モデル」を構築しようとする試みである。

1. 日本人と「場の文化」

1-1. ソーシャルワークが機能する「OS」としての日本人の文化

ソーシャルワークは、人間の社会生活に具体的にかかわる社会福祉援助の実践とその方法である。それは、生活上の困難に直面している人々に対し、その困難状況の改善のために、現実的で具体的な有効性をどこまで持ち得るかが問われるものである。それゆえにソーシャルワークとは、利用者の現実の生活状況と離れたところで観念的に語られるような性格のものではない。その意味で、日本なら日本という社会のなかで、人々の生活現実や暮らしの文化に根ざし、かつそのなかにおいて有効に機能するソーシャルワークのあり方を探ることが必要である。

日本においては、古く大正時代から戦前戦後を通して、主にアメリカの理論の翻訳や移入を中心にしてソーシャルワークが形を整えてきた。もしも、日本とアメリカにおけるソーシャルワークに関する条件の違いが、単に実践がなされる場所の違いのみであるならば、アメリカでの実践のあり方や研究成果を導入し、これをそのまま日本での実践に適用すればことは足りるであろう。しかし、アメリカ社会とそこで暮らす人々の生活に起こる様々な困難を見つめ、それらの困難に直面している人々と向き合う中から構築

されてきたアメリカのソーシャルワーク理論や方法は、当然のことながら日本で暮らす日本人の生活現実を視野に入れたものではない。したがって、それらが日本の利用者へのかかわりや支援に、最も適したものであるという保証はどこにもない。

これまでの日本のソーシャルワークには、理論と実践との乖離や理想と現実の落差への指摘、そしてソーシャルワークの「日本的なあり方」を求める声が多くあった。しかし、そのような課題や要望を主張し合うだけでは、その課題や要望の正当性を確認し合うにとどまるに過ぎない。この乖離や落差を埋めるためには、日本人の生活様式や行動様式、暮らしの価値観などの多くの日本人に共有されている「文化」に着目することが必要であると考えられる。

それは、コンピューターに例えるならば、標準的な「ソーシャルワーク」という生活支援の理論や方法という「ソフト」を、日本の現実や日本人の生活に適合した形で機能させ、発展させるための「『オペレーション・システム (OS)』としての日本人の文化」という理解である。言い換えれば、日本人とその生活に多く共有されている文化、すなわち生活様式や行動様式、思考様式などの価値観を基盤 (OS) として機能するソーシャルワークのあり方を見出す作業である。

バイオホロニクス (生命関係学) 研究者として場所論を展開する清水博は、日本文化を「場の文化」として、次のように述べている。

日本は約1世紀に及ぶ長い戦国の戦乱を経て、仏教を基礎に普遍的な「場の文化」を生み出した経験をもつ世界でも特殊な国である。世界が場に注目ははじめているこの好機に、なぜ「場の文化」の創造というこの歴史的経験を現代に活かそうとせず、何時までも外に「正解」を求め続けていくのであろうか (清水 2003: 26)

清水にならえば、日本のソーシャルワークのあり方、その「正解」を海外にばかり求めるのではなく、「場の文化」をもつ日本での、日本の社会福祉現場での実践のなかから見出していかなければならない。たとえば、ソーシャルワークにおける「『個人』と『社会環境』との相互作用」という場合に、日本人にとっての「個人」や「社会」、「環境」とは具体的に何を意味するのか、また「受容」や「共感」「自己決定の尊重」などに代表されるソーシャルワークの原則、そして「ストレングス」や「エンパワメント」などの概念は、日本での日本人相手の実践ではどのように具現化され、どのような実践のかたちになるのか。さらに、ソーシャルワークの実践を担うソーシャルワーカーは、そのような原則や理論をどのように「実践化」しているのか。

ソーシャルワークを構成する様々な概念や理論を、日本でのソーシャルワークを機能させる「OS」としての日本人の文化に照らして、そのあり方や実践場面での具現化の姿を検討しなければならない。それは同時に、日本のソーシャルワーカーとその実践を

支える「知」を、あくまでもソーシャルワークの実践現場とそこでのワーカーの経験やリアリティに寄り添いながら、見出していく作業を伴う。そしてこの作業は、日本人の生活や文化に着目することで、日本のソーシャルワークの「内発的な発展」(高田 2003)を目指すものでもある。

1-2. 日本人とその生活を支える「場」への視点

筆者はこれまで、日本人の文化に着目してそれに基づく日本のソーシャルワークのあり方に関する考察を行ってきた(空閑 1997, 1999, 2005, 2008)。その一連の考察のなかで、「人間存在」のあり方にさかのぼって、すなわちソーシャルワークの対象としての人間観について検討することで、日本のソーシャルワークが依って立つ「準拠枠」を探る試みを行った(空閑 2005)。具体的には、「個人」概念に着目し、それが日本人の現実の人間存在を的確に表した概念かどうかいうことを検討した。それはつまり、現実を決してそうではないのに、欧米ソーシャルワークがその前提としている individual としての「個人」を、そのまま日本のソーシャルワークのあり方を考える際の前提や準拠枠にしているのではないかという問いであった。そして、日本の個人は、「社会」というよりはむしろ「世間」を自らの日常生活の「場」として、他者との間柄を重視する「間(あわい)の文化」のなかで日常を営んでいるということを示した。

そのことは、刑法学者であり世間学を研究する佐藤直樹の指摘にある通り、言わば「世間を離れては生きて行けない」日本人の「存在論的安心」にもかかわる問題である。

日本人は「世間」に所属することによって、一定の身分を獲得し、他者と「共通の時間認識」をもち、「存在論的安心」を得ることができるが、いったんそれから離れてしまうと糸の切れた凧のように不安定になる(佐藤 2013: 32)

加えて、近年の国際化、グローバル化の流れのなかにあっても、変わることはない日本文化の深層について考察した臨床心理学者の榎本博明は、今日の日本人のコミュニケーションをめぐる状況について次のように述べている。

「個」の発想が欧米から流入し、欧米流のコミュニケーション論がもてはやされ、「場」や「間柄」に重きを置くコミュニケーションのあり方に揺らぎが生じている。だが、私たち心の深層には、「場」や「間柄」の発想がしっかりと根づいている。(榎本 2012: 45)

これらの指摘にある通り、現実の日本人は、今なお individual の意味での「個人」としてではなく、また、society としての「社会」というよりは、むしろ「世間」という生活世界のなかで、様々な人間関係における「間柄」や、それらが織りなす全体状況としての「場」に包摂された「関係体」としての存在を生きている。

さらに、「間人」概念を提唱した濱口恵俊は、「間人」である日本人が体験する人間関係が織りなす場所を「関係場 (relational field)」と名付け、それが「単なる環境的空間ではなく、行為『主体』の成立基盤」であるとしている(濱口 2003:117)。つまり、日本人における「個性」や「主体性」「その人らしさ」とは、他者との間柄や置かれた状況や場所、すなわち何らかの「場」に依拠したかたちで導かれ、発揮され、受け入れられることによって成り立つということになる。たとえば「世間」とは、日本人が日常生活のなかで、実感として現実に体験している「関係」や「場」の一つである。そこには、他者と共有される空間や機会、状況といった「場」のなかで、まさに「存在論的安心」がもたらされ、支えられる日本人とその生活がある。

哲学者の城戸雪照は、「基本的には、西洋社会は主体の文化、東洋社会は場所の文化と呼ぶことができる」(城戸 2003:174)として、日本人の特徴を次のように述べている。

文化的な意味での日本人と西欧人とを比較するとき、その最も顕著な特徴をきわめて簡略化すれば、日本人の意識が基本的に主体の論理ではなく、場所の論理に規定されているということである。(城戸 2003:177)

すなわち、日本人の場合は、何からの意見や意志を表明する際に、「個」としての自分自身の意思や判断というよりは、その「場」の雰囲気や状況、あるいは「場」を構成する周囲の人々の反応の影響を受け、そして、その「場」に自らを協調させながら、意見表明や意思決定を行う特徴があるということである。さらに城戸は、「タテ社会」「恥」「世間」「甘え」などの日本人論や日本文化論での著名な概念が、共通して「場所の論理の基礎」を持っているとして、場所の論理が日本人の行動様式として内在化されていると述べている(城戸 2003:178)。

また、日本の若者に見られる「ひきこもり」に関する研究を行った内田由紀子は、日本とアメリカでの友人関係に関する調査を踏まえて、日本人の人間関係は、アメリカの「選択ベース」ではなく、「場をベースとする人間関係」であるとして次のように述べている。

日本人に良い友人の特徴を尋ねると、「趣味が同じ」「話題が共通している」「苦労をともにした」というように、何らかの共通基盤についての回答が多く挙げられる。友人を「選んだ」という感覚をもっている人は少なく、同じクラス・クラブだったりすることで場を共有し、結びつきを確認している。(内田 2013:51-52)

このように、日本人の日常生活は、周囲の人々とどのような関係を持ち、その関係を通してどのような「場」が形成されるかということ、そしてそのような「場の中でのネ

ットワークを大切にすること」(内田 2013:52)が、その根本を形作っているといっても過言ではない。日本人にとって、「場の関係性は『安心・安全』を保証する基盤」(内田 2013:52)なのである。

本稿では、そのような日本人の文化を「場の文化」として、それに基づくソーシャルワークのあり方を検討する。すなわちそれは、日本人の生活へのまなざしと、日本人が行動主体や生活主体として成立する「場」への視点、言わば日本人の生活を支える「生活場 (Life Field)」へのアプローチを基盤に据えた「日本流」のソーシャルワークの理論と実践の追求である。

1-3. 「場」と「場所」の違い

ここで、「場」と「場所」との言葉の意味の違いについて述べておくことにする。意味的にも重なりが多いこの両者を、厳密に使い分けるとするのは困難ではあるが、たとえば『広辞苑 (第6版)』では、「場所」には「ところ」や「位置」という意味が記されており、一方で「場」には物理的・空間的な「場所」の意味に加えて、「物ごとの行われる時機・局面」という意味も示されている。「場をわきまえる」や「場数をふむ」「場馴れする」「場がなごむ」などと言うように、「機会」や「状況」「雰囲気」などという意味でも、「場」が使われるということである。その意味では、「場」は「場所」に比べて、意味がより広い言葉であるといえる。上で引用した城戸は、「場」と「場所」との違いについて、次のように述べている

個々の生命体から離れて、共通の認識機構、環境世界によって形成される場所のことをここでは「場」と呼ぶことにする。「場所」としては個々の生命体は異なるが、「場」を同じくすることによって、「場」における認識、存在、論理は複数の生命体に共有化されることになる。(城戸 2003:22-23)

城戸は、個々の生命体はそれぞれに自らの「場所」を持っているが、認識の仕方や環境あり方などが個々から離れて、複数で共有される場所を「場」と呼ぶとしている。また、評論家の丸太一は、その著『「場所」論』のなかで「場所」を以下のように説明している。

「場所」は、人間の活動を前提にしている。人が活動するには必ずどこかの場所を占めている。場所とは、そのような人間に係わられている所、人間に居られている所、いわば「居所」や「居場所」である。(丸太 2008:50)

加えて、仏教や日本思想を研究する末木文美士によれば、『「場所」』は抽象的な空間ではない。それは、他者と出会い、関係を結ぶ場であり、それ自体が他者との共存のなか

で形成されている」(末木 2012:39)とされている。

本稿では、特別に断りがない場合は、「場所」を具体的な「ところ」や「居場所」「物理的空間」を表す言葉として、そして「場」を、「場所」の意味に加えて「機会」「状況」「雰囲気」や「間柄」「関係」などの(場合によっては抽象的な)意味をも含むものとして、使い分けることとする。

2. 「場」を基盤にしたソーシャルワーク

2-1. 「主体」の成立基盤となる「場」への着目

カソリックの神父である井上洋治は、キリスト教が日本に根付かないのはなぜか、そして根付かせるにはどうしたらよいかについて考察した論文のなかで、以下のように述べている。

もし存在論的にも、また社会的にも、日本文化の基底をなす考え方が「個」ではなく、「場」であるとすれば、そこからでてくる必然的な帰結は、日本文化に受容された日本キリスト教は、現在までのような西欧の「個」の神学ではなく、「場」の神学をもたねばならず、またかならず持つようになるであろうということである。(井上 1984:2)

また、城戸は日本の哲学研究について、それが西洋哲学の枠組みの中で行われることの限界を以下のように指摘している。

西欧の哲学の主語論理の枠組みの中で、日本人がいくら哲学を学び、日本において発展させようと思っても、無理なのである。そうした主語論理的な独創性は場所の論理に基づいて考える日本人にはなかなか期待できない。(城戸 2003:196)

これらの指摘にあるように、日本文化の基底をなす考え方が「個」ではなく「場」であること、加えて日本人の思考様式が西欧とは異なる「場所の論理」に即していること、すなわち「場の文化」としての日本人の文化を踏まえての、ソーシャルワークのあり方が検討されなければならない。しかし、そのような「場の文化」を持つからといって、日本人には個としての「主体」がないなどということでは決してない。自らが自らの生活の主体であるために、自らが所属あるいは関係する「場」を重要視するということである。

前述したように、濱口は西欧の「個人」概念について、それは日本人を表すにふさわしくない概念であるとし、新たな「にんげん」モデルとして「間人」概念を提唱しているが、日本人にとっての「主体」のとらえ方を検討するにあたり、ここから多くの示唆を得ることが出来る。

古くから日本語では〈ひと〉のことを「人と人之間」を意味する「人間」と表現してきた。それは間柄と分離しえない〈ひと〉を意味する。この漢字表現の語順を逆にしたのが「間人」である。それが諸種の関係の集約された「場所」と結びつくことは言うまでもない（濱口 2003 : 130）

濱口が提唱する「個人」とは異なる「にんげん」モデルとしての「間人」は、『関係』という実在の場に自己の存立の根拠を見出す（濱口 2003 : 117）存在であり、「自己と他者との意味連関の中で、その連関性それ自体を自己自身として受け止める」（濱口 2003 : 119）存在であるとされる。すなわち濱口によれば、日本人とは、他者との関係や複数のそれが織りなす場との関係において、自己すなわち「主体」としての自分自身が支えられるという、そのような人や場所への関与が「主体」形成の基盤となる「関与主体」（濱口 2003 : 118）としてとらえられる存在なのである。したがって、「間人」である日本人にとっては、「諸種の関係の集約された『場所』」との結びつきが指摘されているように、様々な人間関係やそれが織りなす「場」のなかで、「主体」としての自己が成立し、支えられるということになるといえる。

さらに、日本文化は伝統的に「場の文化」であるとする清水は、「自己が生きていることの自覚とは、結局場において自己が存在しているこの動態の自覚」（清水 2003 : 30）であるとして、自己の存立基盤としての「場」との関係を強調している。これらのことから、日本のソーシャルワークに求められるのは、「場」とともにある生活主体としての自己を支える生活支援のかたちであるといえる。

2-2. 「個」を支える「居場所」づくり

そのような「場」への視座を基盤にしたソーシャルワークは、今日の様々な生活問題に対して、自らが個性や自分らしさが発揮でき、行為主体や生活主体となれるような他者との関係や居場所のなさ、すなわち自らを支える生活空間や機会としての「場の喪失」という観点からとらえる。そしてそのような場の喪失状況にある人々が、再び自らの生活の主体として存在し生きるための「場づくり」という観点から、生活支援に取り組む社会福祉援助の実践と方法の追求である。

若者の居場所や居場所づくりに関する実践や研究を行っている萩原建次郎は、「大人の世界でも自らの存在基盤や拠り所となっている家族や職場、地域といった多様な次元のコミュニティが脆弱化し、さらには自己や他者、自らが生き働いている世界を生き生きと感じ取ることができない事態が広がっている」として、今日、居場所の確保や居場所づくりは、子どもや若者だけの問題ではなくなっていると指摘している（萩原 2012 : 25）。高齢者なども含めた全ての世代に、社会的な居場所づくりの取り組みが求められているのである。また、社会学者の藤竹暁は居場所について考察した論考のなかで、次

のように述べている。

そこには自分が愛情によってとり包まれている、自分自身を表出できる、メンバーによって了解されているなどとしてとらえられる共属感覚がある。居場所は人間にとってなくてはならない場所である。人間が居場所を失ったとき、それは社会的に死を宣告されたようなものだ。(藤竹 2000:47)

人々への生活支援を担うソーシャルワークは、どのような状況にある利用者も、自らの「居場所」を失うことなく「社会の一員」として認められ、生きて存在する限り「社会的な死」には決して至らしめないことをその使命とする。それは、利用者にとっての「居場所」の維持や再構築を、家庭や施設や地域をフィールドにして行う営みである。ここで言う「居場所」とは、ただ単に雨風をしのげる物理的な空間という意味ではなく、「人が自分のアイデンティティを確認することのできる『場』」(三本松 2000:197)であり、「私たちの主体(自己意識)を根底で支えている基盤と根拠」(萩原 2012:25)を意味する言葉である。このような「居場所」のあり方について、社会保障や貧困問題を研究する阿部彩は次のように述べている。

「居場所」は社会の中での存在が認められることを示す第1歩なのである。社会を学校の教室にたとえれば、そこに、自分の「椅子と机」がある。それと、同じことである。(阿部 2011:119)

阿部の指摘にあるのは、主体である自己は、自らの存在が認められることにより支えられ、人間には、そのような「場(居場所)」が社会的に与えられなければならないということである。このことは、「生きる場の獲得」が自立支援のゴールであるという、社会学者の宮本みち子が生活保護受給者の自立支援について述べた言葉と重なる。

そもそも自立支援の究極の目標は、社会的存在としての「私」を取り戻すことにある。そのためには、社会に参加し、活動し、他者との相互関係のなかで自分自身の存在意義を実感できる場が必要となる。これが「生きる場」の意味である。(宮本 2012:127)

さらに宮本は、就労で挫折し、傷を負った若者にとってまず必要なことは、「就労に限らない『生きる場』を見つけること」(宮本 2012:128)であるとしている。宮本の言う「生きる場」とは、すなわち、社会の一員としての「私」が支えられる「居場所」のことである。

また、評論家の芹沢俊介は、その著書のなかで、認知症高齢者にみられるいわゆる「徘徊」の根源にあるものを、自分の「居場所」を見いだせないことによるよるべなさという不安であるとして、次のように述べている。

徘徊はただあてもなくさまようのではない。そうではなく、「いま・ここ」において自分を見失ってしまったゆえに、どこかにあるはずの「いま・ここに・いる」という存在感覚を求めて徘徊するのではないか、同じことだが、それはよるべなさという不安を恐れ、「いま・ここに」が保障される、居場所を求める行動なのではないだろうか。(芹沢 2012: 176)

「徘徊とは自らの居場所を求める行動」という芹沢の指摘は、認知症ケアに留まらず、ソーシャルワークに関しても重要な指摘であると考えられる。なぜなら、自分が「いま・ここに・いる」という「存在感覚」は、居場所があることによって、あくまでも「社会的(ソーシャル)」に支えられるからである。すなわち、ここで言われる「居場所」とは、私たちにとって「存在感覚」を与えてくれる「つながり」であり、そのつながりの網の目としての「場」のことである。そのような、人の「存在感覚」が社会的に支えられ、かつ「存在論的安心」がもたらされる「つながり」とそれが織りなす「場」の構築が、援助者がかかわることで可能になるという生活支援のあり方、そしてその「場」で体験される「つながり」の豊かさが人々の生活の豊かさをもたらしという生活支援のあり方を、日本流のソーシャルワークとして描いていきたい。

3. 「生活場モデル (Life Field Model)」の構想

3-1. 「生活場 (Life Field)」の構築や充実を目的にすること

今日では様々な福祉サービスが、利用者とサービス事業者との「契約」によって利用される形になっており、そこでは自己決定に基づく、自律的な判断が利用者に求められている。そのような状況のなかで、日本のソーシャルワーク実践が、たとえば自己決定ができないことなどを否定的にとらえることになってはいないだろうか。また、そのことが、いたずらに個人としての「強さ」を利用者に求め、自己決定や自律を強いることになってはいないだろうか。さらに、それによって利用者に新たな精神的負担や生活のしづらさを負わせることになってはいないだろうか。

これまで述べてきたように、日本人とその日常生活の営みにおいて大切なのは、「個」としての強さよりもむしろ、人と人との関係性(間柄)のあり方であり、それを支える「場」のあり方なのである。まさに「日本では人間関係は『場』から生まれる。『場』を失ってしまえば、私たちは孤独に戻っていくしかない」(橋 2012: 160)のであり、他者との「人間関係」とそれが織りなす「場」こそが、日本人とその生活を支えるのである。

individual としての「個人」を前提とし、いたずらにそのような「個人」の強さや自律を求めるソーシャルワークであれば、たとえば「他人に頼らずに生きる」ことを利用者から求めることになり、それはややもすると日本人にとっては大切な人との「間柄」の

切断、かつ大切な「場」の喪失に向けて、生活支援の活動が働くことになりかねない。もちろんこのことは、日本人が強い自律した個人になることを否定するわけでは決してない。そうではなく、そもそもソーシャルワークとは、利用者の生活習慣の無理な変化を求め、そのような形での自助努力を促し、自律的な強い「個人」となることを利用者にも求めることが目的ではないということである。その目的とは、あくまでも利用者の安定した生活の回復や維持にあるのであり、必ずしも個人の変化のみを求めることではない。日本のソーシャルワークには、日本人である利用者にとっての、自然な生活のかたちやその連続性が支えられるためのかかわりや働きかけが求められるのであり、そこに「個」を支える「場」への視点が求められるということである。

他者や地域とのつながりのなかにある日々の安定した暮らしと、その「暮らしの手ごたえからくる『生きる実感』」（外山 2003 : 35）を利用者が受け止めることができるような「場」の構築、そして利用者とその生活を支える「場」がもつ力の充実を、援助の目標にして語りなおされたソーシャルワークが日本に必要なのである。

そのような、人々の生活を支える「場」、すなわち「生活場 (Life Field)」を重視して、この「生活場」がもつ力や可能性への信頼と、「生活場」の豊かさを目指すソーシャルワークの方法や実践のあり方を、「生活場モデル (Life Field Model)」と呼ぶことにしたい。

3-2. 「場」の力へ着目するソーシャルワーク

ソーシャルワークの「生活場モデル」は、何より人々の暮らしを支えている「場」の力に着目する。ケアに関する論考を多く記している三井さよは、「一人ひとりのケア提供者の行為や能力には還元できない、さまざまな人やモノが織りなすことで生まれる〈場〉の力は、現場で決して小さくない役割を果たしている」（三井 2012 : 18）として、「場」の力に着目したケアや支援のあり方の検討を提唱している。三井は、ここでいう「場」とは、「ある特定の空間における、さまざまな人やモノが織りなす関係性」（三井 2012 : 25）であるとして次のように述べている。

いいかえれば、〈場〉の力に注目するということは、利用者や患者が〈場〉を構成する主体であることとらえることでもある。利用者や患者は、ケア提供者との関係だけでとらえられる存在ではなく、その他の多くのモノや人と自らかかわって生活している「人」なのである。（三井 2012 : 25-26）

そのような「場」への視点に基づく援助は、たとえば自らの力では生活上の困難を解決できないということ、また自律した主体的な意思決定や行動ができないということなど、そのような「個」としての利用者の「弱さ」が問われるようなことは含まない。む

しろ、誰もがそこを構成する主体として認められ、そのような主体としての利用者であることを支える「場」の力をいかに豊かにするかが援助の課題となる。そして、そのような援助のあり方は、利用者にとっては、自らの「弱さ」がそのまま受容されることから、その「場」の力に支えられて、新たな生活上の価値や世界が広がる体験をもたらす。

阿部は、「『ここは、私の居場所だ』『私はここにいてもいいんだ』という安心」が、「ほとんど動物的といってもいいほど、私たちの心身の根幹にある」として、人にとっての居場所のかけがえのなさを述べている（阿部 2011:117）。「場」がもつ力やそのあり方を重視する援助とは、そのような人としての根源的な安心を、利用者が実感し、得られるような援助である。

「場」を基盤にして展開されるソーシャルワークの「生活場モデル」とは、利用者にそのような体験や安心を可能にする多様な他者やモノとの関係、すなわちそのような関係が様々に織りなすことで生まれる「場」の構築と維持を志向する。そして、そのような「場」がもつ人を支える力とは、まさにその場を構成する人々の関係や、そこに在るモノ等とのコミュニケーション、すなわち「相互作用」によるものである。「生活場モデル」は、そのような「場」における相互作用の力、すなわち「場の力」によって、利用者自らがその主体となる生活が支えられる支援のあり方を追求するものである。

4. 「共創」の営みとしての「生活場モデル」の展開

4-1. 日本人にとって「場」を失うということ

前章では、日本流のソーシャルワークのあり方として、「個」ではなく「場」を基盤にした「生活場モデル」を提示した。それは、日本人とその生活を支える「場」に着目したものであり、あくまでも利用者の暮らしの現実へのアプローチを重視するものである。ここで言う「場」とは、利用者が日常で経験する場所、環境、状況、あるいは関係性や機会であり、まさに利用者の生きる世界、生活世界がそこにある「生活場」である。

逆に言えば、日本人にとって、そのような生活の基盤となる「場」を失うことの影響はとても大きい。それは、自らの主体的な生活そのものを失うほどの体験となり得る。内田によれば、日本人は、友人関係や家族関係、職場の関係など自分の置かれた「場」の中でやりとりされるサポートや思いやりを重視する（内田 2013:53）として、次のように述べている。

アメリカのように「助けて！」と声を上げることで慣れていない日本人は、たとえ「場」

がなくなってしまうとしても助けを求めず、誰かが気づいてくれるのを待つという受け身の姿勢をとってしまいがちである（内田 2013 : 54）

何らかのサポートが必要な状況のなかにあるにもかかわらず、必ずしも自ら積極的に助けを求めるのではなく、「なんとなく助けて欲しいという雰囲気や相手に察知してもらって受け取るサポートに価値を感じる」（内田 2013 : 53）というのが、日本人の文化であるという指摘である。すなわち日本人にとって、そのような「雰囲気や察知してもらおう」人間関係としての「場」を失うことは、その生活の安定を失うことにもなりかねないということである。言わば、利用者が「場」を喪失するような事態に至らさない支援、あるいは「場」の維持や構築を支える支援が、日本のソーシャルワークに求められる。

さらに、そのような「場」は、一つあれば良いというようなものではない。ホームレスなど貧困状態にある人々の生活相談や「当事者同士が出会う『場』」（湯浅 2008 : 137）としての居場所づくりの活動を行ってきた湯浅誠は次のように述べる。

自分の部屋しか居場所を持たない人たちは、自分の部屋をも居場所ではなくしていってしまう。その意味では、人間というのは自宅と学校、会社、サークル、ネットコミュニケーションなど、複数の居場所がないとたない生き物なのではないだろうか。（湯浅 2008 : 137）

つまり、居場所は、もしもそこが自分にとって唯一の居場所であり、なおかつ他者や外との関係が遮断された閉じられた空間や場になったならば、逆にそこは自分の居場所ではなくなってしまう。それゆえに、人間には「複数の居場所」が必要ということである。これに関連して、前出の内田は、ひきこもり支援として行われる居場所作りについて、以下のように述べている。

ひきこもりが長く続いていた人たちの「場」を提供するという一方で、同じ悩みや経験をもつ人たちとの集まりから少しずつ心を開き、他者との関係を構築することには一定の評価ができるだろう。しかし、その「場」が、そこだけで閉じてしまって、社会の中にある場との接点ももてないとすれば、やはり広い範囲でのサポートを得ることは難しい。（内田 2013 : 54）

人々の生活の支えとなる「場」は、それがそこだけで閉じられたものではなく、外に開かれ、外の世界と何からの接点をもっていることが重要である。まさに、内田が言うように「『場』とは、自分の居場所であり、かつ世界とつながっている場所であらなければならない」（内田 2013 : 54）のである。「生活場モデル」の実践は、人々の生活を支える「場」と社会とのつながり、社会との接点を持つ「場」への意識、何からの形で社会とつながる回路をもつ「場」づくりへの意識を持ちながらの、「ソーシャル」なワーク

でなければならない。

4-2. 「生活場」を「共創」するソーシャルワーク

ソーシャルワークの「生活場モデル」とは、利用者を取り巻く「場」の構築、利用者と「場」との関係、あるいはそのような「場」の変化への働きかけを通して、利用者の主体的な生活を支えるものである。それは、利用者に「個」としての「強さ」を求めるいわゆる欧米流のソーシャルワークのかたちでは決してない。「人之間」として存在する言わば「状況依存的」で、決して欧米人のような個としての強さを持たない日本の個人が、その弱さのままで尊重され、存在が支えられる支援のかたちである。

それは、他者との関係の豊かさと、その関係（その人を取り巻く人やモノ、あるいは動物などとの関係）が織りなすことで構成される生活空間や環境としての「場」の力を重要視するソーシャルワークのあり方である。言い換えれば、そのような「場づくり」という観点から、家庭や施設や地域における生活空間や環境づくり、まちづくりやネットワークづくりと、一人ひとりの生活づくりを目標にした、ソーシャルワークの理論と実践の追求なのである。

清水は、人間は一人ひとりそれぞれ独自であり、その人生もそれぞれ独自であって、他人との交換が絶対に不可能であるという、人間の本性としての多様性について考察したなかで、人間の存在を次のように述べている。

すなわち、人間はそれぞれ「それぞれの生活の場所でその場所の歴史をつくりつつ、同時にその歴史の中に自己を位置づけている存在」である。それは、一方では場所に存在する個物としての場所の歴史の創造に参加し、他方ではその場所の創造力に支援されて自己の歴史を創造する存在である。(清水 2000 : 30-31)

人間は、家庭や学校、地域や職場などの自らがかわり、所属する場所との相互作用のなかで、その場所に影響を与え、同時に場所から影響を受ける存在である。その意味では、その人が関与する「場所」との関係を抜きにしてのその人への理解はあり得ない。日本のソーシャルワークは、そのような人への理解のあり方に基づいた利用者とその状況への理解を、援助の基盤とするべきである。利用者の生活のなかで、利用者が関与することでその場を支えると同時に、その場から利用者が支えられる、そのような相互作用が生じる「場」すなわち「生活場」を、利用者および関係者とともに「共創」していく営みとしてのソーシャルワークが求められる。

生命機械工学の立場からコミュニケーションについての考察を行った三輪敬之は、「背景の異なる人間が夢や目標を共有し、一緒になってそれらを実現していく創造的過程」(三輪 2000 : 283)を「共創」であるとしている。ソーシャルワークとは、まさに

利用者の生活の安定や回復を、利用者や関係者とともに創造していく「共創」の営みである。利用者の生活の場すなわち安定した暮らしの環境づくりのために、利用者が社会とつながる機会づくり、利用者の居場所となる空間づくり、利用者が尊重される人間関係や場づくりのための営みである。

今後は、そのような「関係」や「場」を利用者と共に創造、すなわち「共創」する「生活場モデル」を日本流のソーシャルワークとして位置づけ、様々な社会福祉現場での実践や事例研究等の実践研究に反映させるとともに、その機能や有効性を検証しながらさらなる考察を深め、充実させていくことが課題となる。

5. 「日本国籍」をもつソーシャルワーク研究

5-1. 学問には「故郷」や「国籍」が必要

本稿のねらいは、日本人の生活や文化に根ざしたソーシャルワークのあり方を見出すことにあった。そのための取り組みとして、日本人の生活および生活の価値観や行動様式、習慣などの文化（日本人の「場の文化」）に根ざした「生活場モデル」を提示した。

ソーシャルワークにおける「生活場モデル」とは、日本人の生活を支える家族や他者との関係の豊かさと、その関係（その人を取り巻く人やモノ、動物などとの関係）が織りなすことで構成される生活空間や環境としての「場」、すなわち「生活場」を重視し、この「生活場」がもつ力や可能性を信頼して、「生活場」の豊かさを目指すソーシャルワークのあり方である。それは、自らの存在が社会的に支えられる「つながり」とそれが織りなす「場」の構築が、ソーシャルワーカーがかかわることで可能になり、その「場」で体験される「つながり」が、人々の「存在論的安心」をもたらし、かつその豊かさが人々の生活の豊かさをもたらす、という考えに基づく生活支援のあり方である。

本稿全体のまとめとなる本章では、この「生活場モデル」が、日本の社会福祉における、確かなソーシャルワークの実践や方法として、さらなる発展と成熟に向かうための課題や、取り組むべき内容およびその方法について述べる。

ソーシャルワークの理論や実践のあり方は、確かに様々な生活上の困難を抱える人々の社会生活を支援するという意味で、国際的にも一定の普遍性をもつものである。しかし、一方でそれは現実的で具体的な人々の日常生活にかかわるものであり、その意味で、人々の間で意識的、無意識的に共有されている生活の価値観や生活習慣、生活感覚などの、その国や地域の社会的・文化的な特性にも根ざしたものでなければならない。「学問には『故郷』はどうしても必要」（佐伯 2006: 281）という言葉を借りれば、ソーシャルワーク研究にも「故郷」や「国籍」が必要ということになるであろう。

経済学者で思想家でもある佐伯啓思は、日本の学問が抱える問題について次のように

述べている。

現代の社会科学や人文科学系の学問の大きな問題は、それが過度に西欧近代的な、もっと限定していえば、戦後アメリカ的な歴史観や世界観に取り込まれているところにある。自前の思想というものをいまだにわれわれはもちえていないのです。(佐伯 2006: 228)

佐伯の言葉を借りれば、日本のソーシャルワークには、その対象理解の視点や援助目標、さらには援助方法や過程などの実践を支える、いわば「アメリカ的」なものではない日本的な「自前の思想」が必要であるということになる、しかし、それは、アメリカをはじめとする諸外国から学ぶことを否定するものではない。大切なことは、その国や地域性に応じたソーシャルワークのあり方を見出して実践することであり、なおかつそこに止まらずに、ソーシャルワークとしての国際的普遍性を探っていく作業である。

5-2. 「生活場モデル」の可能性

前述したように。日本人は「社会」というよりむしろ「世間」に生きる存在である。そこでは、日本人は、いわゆる individual としての「個人」として生きているわけではなく、さまざまな社会的な関係、すなわち他者との「つながり」や多様な「場（生活場）」との関係のなかで、そのような関係を重視して生きる存在である。つまり「場」が個人と家族およびその生活を支えるものとするならば、そのような日本の個人が体験する様々な生きづらさや生活のしづらさは、そうした「場」や「場における様々な関係」のなかで現れるものととらえることができる。これに関連して、杉野昭博はソーシャルワークを以下のように説明している。

したがって、ソーシャルワークとは、「生きづらさ」を抱える個人やその家族を対象にして、その「生きづらさ」の原因となっている「個人と社会との不調和」あるいは「社会関係の困難」を調整することによって援助を行う活動として定義できる。そしてこうした「個人と社会の不調和」のことを「つながりの喪失」と呼び、この調整のことを「つながりの回復」と呼ぶこともできる。(杉野 2011 b: 26)

すなわちそれは、個人がつながりを喪失することによって生じる「生きづらさ」に対して、「個」としての一人ひとりを強くする方向ではなく、「個」が支えられる「つながり」や、そのような複数の「つながり」が織りなす「場」を維持あるいは再構築することで、そのような「場の力」により、一人ひとりとその生活が支えられていくというソーシャルワークのかたちである。日本で求められるソーシャルワークとは、そのような「つながり」や「場」の豊かさを目指す方向での生活支援のあり方なのであり、それが本稿で提示した「生活場モデル」である。

また、このような「場所」や「場」への認識について、『場所の現象学』を記した地理学者のレルフ（Relph, E.）は、次のように述べている。

場所について整理された知識がないということは、現実には問題である。もしも場所が世界における人間存在の基本的な側面ならば、またそれが個人や人間集団の安全性やアイデンティティの源泉ならば、意義ある場所を経験し創造し守っていくための手段を見失わないようにすることが重要である（Relph = 1999 : 37）。

人間が社会的な存在である以上、必ず何らかの「場」を必要とし、家庭や学校、職場、地域などの様々な「場」においてその生活を成り立たせる。その意味では、「場所」について整理された知識や人々にとって「意義ある場所を経験し創造し守っていくための手段」が求められるのは、なにも日本に限ったことではない。その意味で、ソーシャルワークの「生活場モデル」は、日本の中だけに止まらない可能性をも持つのである。

おわりに

本稿では、日本人の生活や文化に根ざした日本流のソーシャルワークのあり方に関する検討を行ってきた。日本人は社会というよりは「世間」という生活世界に生きる個人である。それは、そのようなつながりや関係が織りなす「場」によって、自らが生活の主体として支えられるという存在である。すなわち、日本人の暮らしを支えるのは、家族や世間という「関係」が織りなす「場」であり、家庭や地域、職場、学校、施設という具体的な「場所」で体験される「関係」である。そして、そのような「関係」や「場」が単なる物理的な空間ではなく、自らにとって「居場所」であるということが、安定した生活を営むうえで重要なのである。

そのような「関係」やそれが織りなす「場（生活場）」を重視する日本人の価値観や生活習慣を「場の文化」として、そのような「場の文化」に基づいた日本のソーシャルワークのあり方を「生活場モデル」として提示した。それは、日本人の生活と文化を踏まえ、利用者にとっての生活の基盤となる「関係や場所」、すなわち生活場へのアプローチを重視し、その生活場の維持や構築さらにその豊かさを志向するソーシャルワークのあり方である。

今日では様々な領域や分野で「国際化」が進展していく状況にあるが、だからといってわが国のソーシャルワークに影響を与える「日本的なもの」に目をつむって良いということではない。国や地域による生活や文化の差異を考慮しないままに、ソーシャルワークの方法や技術の「普遍化」や「標準化」を進めることには意味はないであろう。

「国際化」が進むなかで、あるいはそういう時代であるからこそ、「日本国籍」を持つ、日本の個性や独自性に根ざしたソーシャルワークを大切にしていかなければならない。

さらに、このような日本の独自性をもったソーシャルワークの発展は、必ずしも、日本のなかだけというような閉鎖的な方向へと向かうものではない。諸外国の、たとえばアメリカならアメリカのソーシャルワークの理論や方法・技術に対し、そこでの文化的環境の中では見いだせなかった新たな理解の可能性が、日本という文化圏の中での人々のあり方、生活現実、それらと向かい合うソーシャルワーク実践の考察を通じて掘り得ると考える。そのことにより、文化を超えたソーシャルワークの普遍性をも見出す道が開かれると考える。

文 献

- 阿部彩 (2011) 『弱者の居場所がない社会－貧困・格差と社会的包摂－』 講談社。
- 榎本博明 (2012) 『「すみません」の国』 日本経済新聞出版社。
- 藤竹暁 (2000) 「居場所を考える」 藤竹暁編 『現代人の居場所 (現代のエスプリ別冊)』 至文堂, 47-57。
- 萩原建次郎 (2012) 「近代問題としての居場所」 田中治彦・萩原建次郎編著 『若者の居場所と参加－ユースワークが築く新たな社会－』 東洋館出版社, 18-34。
- 濱口恵俊 (2003) 『「間 (あわい) の文化」と「独 (ひとり) の文化」－比較社会の基礎理論』 知泉書館。
- 井上洋治 (1984) 「日本文化とキリスト教」 『創文』 245, 1-4。
- 城戸雪照 (2003) 『場所の哲学－存在と場所－』 文芸社。
- 空閑浩人 (1997) 「日本におけるソーシャルワーク実践に関する一考察－「世間」に着目した高齢者の生活支援の検討－」 『同志社社会福祉学』 (同志社大学社会福祉学会) 11, 81-93。
- 空閑浩人 (1999) 「日本人の文化とソーシャルワーク－受け身的な対人関係における『主体性』の把握－」 『社会福祉学』 40(1), 113-32。
- 空閑浩人 (2005) 「日本のソーシャルワークにおける文化的基盤－『世間』に生きる日本の『個人』への視点－」 『評論・社会科学』 (同志社大学社会学会) 77, 43-63。
- 空閑浩人 (2008) 「高齢者福祉施設職員の経験と意識に関する研究－日本のソーシャルワークと『家族』の文化－」 『評論・社会科学』 (同志社大学社会学会) 85, 1-42。
- 丸太一 (2008) 『「場所」論－ウェブのリアリズム, 地域のロマンチズム－』 NTT 出版。
- 三井さよ (2012) 「〈場〉のカーケア行為という発想を超えて－」 三井さよ・鈴木智之編著 『ケアのリアリティー境界を問いなおす－』 法政大学出版局, 13-45。
- 三輪敬之 (2000) 「共創における生命的コミュニケーション」 清水博編著 『場と共創』 NTT 出版, 273-338。
- 宮本みち子 (2012) 『若者が無縁化する－仕事・福祉・コミュニティでつなぐ－』 筑摩書房。
- Relph, E. (1976) *Place and Placelessness*, Pion. (=1999, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳 『場所の現象学－没場所生を越えて－』 筑摩書房。)
- 佐伯啓思 (2006) 『学問の力』 NTT 出版。
- 三本松政之 (2000) 「高齢者と居場所－新しい福祉のあり方－」 藤竹暁編 『現代のエスプリ別冊 現代人の居場所』 至文堂, 193-203。
- 佐藤直樹 (2013) 『なぜ日本人は世間と寝たがるのか－空気を読む家族－』 春秋社。
- 芹沢俊介 (2012) 『家族という意志－よるべなき時代を生きる－』 岩波書店。
- 清水博 (2000) 「共創と場所－創造的共同体論－」 清水博編著 『場と共創』 NTT 出版, 23-177。
- 清水博 (2003) 『場の思想』 東京大学出版会。
- 末木文美士 (2012) 『哲学の現場－日本で考えるということ－』 トランスビュー。

- 杉野昭博（2011）「ソーシャルワークとは何か」平岡公一・杉野昭博ほか著『社会福祉学』有斐閣，21-34。
- 橋玲（2012）『かっこにっぽんじん（日本人）』幻冬舎。
- 高田眞治（2003）『社会福祉内発的発展論－これからの社会福祉原論－』ミネルヴァ書房。
- 外山義（2003）『自宅でない在宅－高齢者の生活空間論－』医学書院。
- 内田由紀子（2013）「ひきこもりと日本社会のこころ」河合俊雄・内田由紀子編『「ひきこもり」考』創元社，44-70。
- 湯浅誠（2008）『反貧困－「すべり台社会」からの脱出－』岩波書店。

A Study of Social Work Based on “the Culture of Field” :
An Idea of “Life Field Model” in Social Work

Hiroto Kuga

The purpose of this paper is to examine an idea of “Life Field Model” in social work theory and practice, while considering that Japanese culture is “the culture of field.” This model thinks as important the look to Japanese life and culture, and the viewpoint and the approach to the “field” where Japanese people can be as the subject of one’s action and life. Furthermore, so to speak, this model is “a Japanese style” of social work, which aims at maintenance, construction, and affluence of the “Life Field” supporting a life of Japanese people.

In that sense, this study of “Life Field Model” is that of social work which surely has “nationality” of Japan. However, it never emphasizes and persists in only the originality of social work in Japan. This social work model may be effective as an international model of social work theory and practice.

Key words : Social work, Social work practice, Japanese, Culture of field, Life field model